

生涯スポーツ推進におけるメディアの役割と課題

青島健太*

生涯スポーツとスポーツメディアの現状ということ
で、雑感みたいな感じですけど、そんな話を少しさせて
いただきます。

今、私がいるのは東京文京区の茗荷谷という筑波大
学の校舎の中の一 corner の教室ですけど、実は私は結婚し
たての時にここから歩いて5分のところに住んでいた
んです。すぐ校舎の裏に文京区のスポーツセンターがあ
って、私がヤクルトスワローズの選手の時にそれが
出来たばかりで、そのスポーツクラブが当時出来たて
のピカピカなんですけど、まだガラガラで誰も使って
いないので、勿体無いからそこで自主トレとかやって
いたんです。プールが50円で、トレーニングジムとか
全部セットで使っても100円ぐらいだったと思います。
27、8年前の話です。津曲先生のお話にもありまし
たけど、30年ぐらい前はスポーツクラブはおそらくバン
バン建てていたでしょうし、そこも最新式なんですけ
ど、今はどういう状況になっているかちょっと分かり
ませんが、あと、すぐそこに居酒屋があって、売れて
いない頃のダチョウ倶楽部がその店の一番奥でネタ作
りとかやっていて、ダチョウ倶楽部の面々がよくウロ
ウロしていました。結構美味しいので僕もよく行った
んですけど、でも、する話はダチョウ倶楽部じゃなくて、
スポーツクラブの話です。

10月に入ってから新聞報道で個人的にはビックリ
するような数字に出会いました。これはおそらく各紙
が報じていたと思うんですけど、各年代別のスポー
ツクラブへの加入率というのが発表されていました。デ
ータの出所は、体育の日の前日に文部科学省が発表
した「2012年度体力・運動能力調査」という文科省が
やったもので、それが毎日新聞に載っていたので、そ
こからの抜粋でご紹介します。全部を紹介する時間
がないのですが、1番驚くべきは10年間を前半、後半
で分けての各年代のスポーツクラブへの加入率です
けども、なんと1番高いのは70代前半の女性が44%
の加入率です。その次が70代後半の男性41%です。
60代、70代は

ほとんど40%前後スポーツクラブに加入していて、
逆に20代、30代は、男女とも基本的には20~30%
ぐらいです。だから60代、70代は20代、30代の人の
倍ぐらいスポーツクラブに入っているんです。そう思
うと先程の津曲先生の話というのは、実態としても現
実としても、ああ、やっぱりそういうことなんだとい
うことがよく分かるんじゃないかなと思うんです。た
だ、このデータだけがスポーツを盛んにやっているか
というふうに取っちゃうのは、乱暴というか危険だ
とは思いますが、ただ本当に40%を超える人達が
スポーツクラブに加入しているというのは、そのデ
ータを持ち合わせていたりする学生の皆さん、興
味があつたら調べていただきたいけど、多分、世
界的にも稀な、もっと凄いところがあるかも分
からないけど、僕は今55ですけど、僕らの先輩
方40%がスポーツクラブに入っているのかと思
うとビックリします。ただ、これの背景として
は、おそらく心情的なものとか肉体的なものは
非常に簡単に想像がつくような気がします。僕ら
ももうすぐそういう世代になりますけど、健康
への関心の高さとか、ある程度時間もある方
々だったり、皆さんが皆さんではないでしょう
けど少し経済的にも余裕があつたりする方々
が健康志向が高まって、あるいはスポーツ
に対する興味も含めて、皆さんスポーツクラ
ブに行っているということだと思います。20
何年前のこの学校の裏の出来たての文京ス
ポーツセンターはガラガラでしたけど、多
分、今もうそこは、さっきの津曲先生のお
話から想像すると、かなり年配の方が来て
いるんじゃないかなと。そういうところは、
民間のところのように入会金とかも取られ
ないし、入りやすいから年配の方がいっぱ
いいると思います。非常に簡単ですけどこ
れが一つ、年齢の高い方々の最近の現状
としては象徴的な感じがします。

じゃあ若い人達はどうなっているのかなとい
うところですけど、これももの凄く面白い
です。皆さんも知っているでしょうけど、
笹川スポーツ財団がこの間、ス

* 鹿屋体育大学客員教授（スポーツライター）

スポーツ白書で今年のものをしました。幼児から10代の若い人たちの色んなスポーツ傾向というものを発表していて、一部は新聞に取り上げられたりしていますけど、個人的には、驚きと共に、そういう時代なんだとも思うのは、今4歳から9歳で一番人気のあるスポーツ選手は誰だと思いますか。浅田真央ですよ。2位は本田圭佑です。逆に10代の第1位は本田圭佑、2位が浅田真央。個人的にショックなのは、野球選手が殆んど入ってないです。4歳から9歳のほうを見ると驚きますよ。1番が浅田真央、2番が本田圭佑、3番が香川、4番に初めてイチロー、内村航平、北島孝介。次が凄い、次はリオネル・メッシです。その後にまだ凄い、澤穂希が続いて、やっと前田健太、10番目が錦織圭。これが4歳から9歳です。顔触れは10代もほとんど同じですけど、後ろのほうに内田篤人とか長友佑都とか、サッカー選手がもっと入ってくる、10代になると、野球の話だけするわけじゃないんですけど、私的にはバックグラウンドが野球なので、これはかなりショッキングなネタなんです。じゃあ、なんでこの事態が引き起こるかというのが、さっきの文部科学省のところに細かいデータが出ていますんですけど、中学校の部活動に取り組んでいる生徒の数が、サッカーをやっている人が野球を抜いたという話です。今年6月の時点でサッカー部員は10年前に比べて5万人増えて25万9千人、およそ26万人がサッカーをやっている。ところが野球は10年前に比べて7万人減って24万4千人ということで、中学校では野球部員よりサッカー部員のほうが多いという時代です。ただ野球は硬式でシニアリーグなんかをやっている連中は学校に属さないで、学校の外のクラブでやるっていう状況もあるので。逆にいうと水泳なんかは、学校の水泳部よりはほとんどスイミングクラブでやっていることになるので、これがそのまま競技人口を反映しているかという、少し分からないところも正直あると思うのですが、ただこれが現状です。ですから、個人的な印象では、皆さんがどう思うかは分かりませんが、年配の方々はバンバン、スポーツクラブに通っているし、若い人達はどちらかというと、昔ですと野球を中心に引っ張ってきていた運動がサッカーにとって変わられて、野球あるいは水泳だとか体操だとか、フィギュアのほうが一番人気があるわけだから、かなり状況が変わってきているというのは、様々なデータから見て取れるんじゃないかなと思うんです。

このメディアの話なんですけど、じゃあメディアはどうなのかということなんですけど、ただ、今の子供達的环境を考えると浅田真央ちゃんというのは、皆さん生で浅田真央を見たことないでしょう。よほどフィギュア好きの方は、追いかけている人はたくさんいるんですけど、誰も生でなんか殆んど見ていないですよ。じゃあなぜ浅田真央のファンになっているかというと、やはりメディア的露出が多い、圧倒的に多い。たぶん本田圭佑もそうです。代表戦でほとんど出てくるし、という背景があるので、今の状況を生んでいるのは、凄くメディアとの関係は密接だろうと言わざるを得ないです。浅田真央はコマーシャルも山ほど出ていますから、やっぱり人気者はメディアがつくっているというのはあると思うんですけど、年配の方々がスポーツジムに通っているのもメディアとの関係性があるのかどうかというところは非常に興味深いんですが、そこは軽々に結論を出せないところではあるんですが、でもそうだろうなという気は、個人的にはしています。

このメディアの話なんですけど、以前書かせていただいたレポート等には、生涯スポーツのメディア・プロモーションというのはかなりキツイと書きました。なぜならば地上波で放送するのは何億もかかるような放送権利料を、年配の方の陸上大会とかゲートボール大会じゃ払えないだろうということからです。そうしたものが取り上げられるのは、殆んど可能性は厳しいということで、もっとローカルなメディアとかインターネットとか、そういうところに生涯スポーツの可能性がみたいないことを私は言っていたんですけど、でも今日の話は少しそれとはトーンが違って、生涯スポーツの時代がきたと言いたいぐらいな感じが残っている気がします。提言も色々書いてありますが、地上波で今、劇的に変わっているのは、この傾向はもう既にありますけど、地上波のスポーツは「世界」という冠がつかないと殆んど放送されないです。世界水泳、世界陸上、世界柔道、世界卓球、世界フィギュア。あと実は凄い放送があるのが、国内的にいうとゴルフと相撲とマラソン大会。マラソンは絶対あります、駅伝から何から。凄い傾向が出てきているんです。今年フジテレビが放送した巨人戦は2本です。かつては20本放送していたんです。もう10分の1になったんです。プロ野球の地上波放送量というのは、その代わり、世界なんとかという、フジテレビはバレー系ですよ、あと世界柔道も持っているかな、フィギュアも熱心です。そう動い

ているんです。

ただ、今日はここが私の一番のポイントなんですけど、じゃあ生涯スポーツはもう青色吐息かというところ、これが全然違うと思うんです。一番実は今、地上波で取扱量が多いのは、正確なデータは持ってないんですが、生涯スポーツがたぶん一番多い、地上波で取り上げられているのは、朝8時15分から有働由美子がやっている、あの番組を見続けてください。たぶん1ヶ月に5、6本は年配の方のウォーキング講座とか、健康づくりとか、山歩きだとか、もの凄い生涯スポーツの領域に入ってくる、競技スポーツ的でないものが多いです。でもウォーキングとかそういう健康志向の番組は、朝の時間帯の番組は極めて多くやっていますね。「鹿屋高齢者陸上大会」とは言わないんだけど、鹿屋の人が朝もの凄い元気に皆さんで歩いているとなると、そういうのがテレビにバンバン乗ってくるんです。巨人戦2本よりは圧倒的に取り上げられている頻度は高いはずですが、僕はテレビをそんなに見続けているわけじゃないけど、圧倒的に高い。ですから、そういう意味でいうと、今は生涯スポーツの時代が来たというのか、メディア的にも非常に向こうは興味を持っています。

こういう時に、じゃあ何をやるかということなんですけど、色々な方法があると思うんですけど、私が注目するのはそれ単体で取り上げるということもあるんですけど、むしろ生涯スポーツと子供のスポーツが、その競技の普及・振興に極めて大きなエネルギーという推進力を持っているという気がするんです。今までは本田圭佑を映して、本田圭佑を語って、サッカーを見せるという手法だったと思うんですけど、本田君はもちろん魅力であるんだけど、そのサッカーをもっと前に進めるためには、サポーターを増やしたり理解する人を増やすには、さっき言った40%以上がスポーツクラブに通っている年配の方々と、浅田真央ちゃんを応援するもっと世代の前の人達の興味をどう引いていくかということが、サッカーだったりスポーツだったり生涯スポーツにかなり有効に機能する気がするんです。例えばどういうことをやっていくかというところ、ワールドカップ予選の中に少年サッカーの情報を入れているというのは結構キツイ話です。あるいは年配の方がサッカーをやっているところの情報を入れているのは無理なんだけど、でもそういうことになっていくんだと思うんですが、例えばFIFA＝サッカー連盟も極めて戦術的というのか、本田がなぜ人気者になっ

ているかということかというと、選手がグラウンドに入ってくる時に、必ず子供と一緒に入ってきます、手を繋いで、国歌斉唱、記念撮影のところまでギリギリまでずっと子供達と一緒にいるんですよ、手を繋いで。あるいは控えているところもそうです。あれを見て子供はワクワクしているはずですよ。あるいはフィギュアでいうと、浅田真央ちゃんが滑った後に氷の中に投げ込まれるぬいぐるみとか花束を拾いに行く子は、みんな小さいスケーター達です。ちびっこスケーター達、彼女達、小さい男の子もいるけど、彼らが可愛らしくキャーっと滑って、それを拾って真央ちゃんのところへ届ける、みたいなところで子供が映り込んでくるんですよ。あれが、これからとっても大事になってくるはずですよ。むしろあそこをメディアはもっとメインで映さないといけないんです。それにもうすぐ気付くと思います。あるいは藤本先生のお話にもあったけど、色んな国際大会になるとボランティアの方々が活躍している。そういうボランティアの方がどんな感じで頑張っているのかというのを、ああいう大会の中で取り込んでいって、そういう方々をフーチャーしていくと、そのジェネレーションがまたそこへ入っていくんです。だからその競技の中に対して引っ張り込むのに、年配の方、いわゆる生涯スポーツ的なところで活躍の方と年若い人達のパワーというのを、競技団体やそのスポーツがどう取り込むか、というのがこれからとっても大事になってくると思います。

生涯スポーツというのは、穏やかに事が進んでる感じがするところを、むしろ一番力を持っている、魅力的なところに生涯スポーツがきているという気がしてならないです。野球は何をやっているのかというと、たぶん野球が負けているのはそういうことを怠っているからです。でも、例えばアメリカとかも必ずやっているんです。これは昨日の毎日新聞ですけど、今ワールドシーズンを戦っている上原君がワールドシリーズの直前の練習で、子供とストレッチしているんですよ。こういうシーンって、アメリカとか色んなスポーツでよく見るでしょう。日本はそういうところに入っちゃいけないとか、女子供は駄目みたいなところがあるんです。でもこういうのが、たぶん大事なんですよ。これは毎日新聞の写真ですけど同じもの、芝生の上でストレッチしていますね。こういうので子供が「ああ、いいな」というふうに入ってくるシーン。勝った負けたをアピールするというのは競技として当たり前だけ

ど、その周辺にあるこういう営みというか、生涯スポーツ的なところが、たぶん凄く意味を持つし大事になるっていう時代で、メディアはまだあまりそっちにシフトはしていないですけど、たぶんそういうことを熱心に行っていくことがとっても必要なことになってくと思います。98年に横浜ベイスターズが優勝した時に、権藤博という人が監督だったんです。権藤さんのお嬢さんって海外暮らしをされていた、モデルさんみたいに綺麗な、その時27、8歳ぐらいのお姉さんが、権藤さんの宜野湾のキャンプを訪ねて来たら、当時60歳前後だった権藤監督が、27、8歳の自分の娘さんとプロ野球のキャンプ中に、ベンチの前で男女でキャッチボールをしたんです。僕はその光景を見た時に、「これは最高に良い光景だな」と思ったんです。それが何を意味しているのかはその時はあまり深く考えなかったけど、そういう光景に色んなものがこもっている気がするんです。女性も呼ぶような力があるだろうし、生涯スポーツ的でもあるし、野球が弱点にしているところを克服するようなコンテンツでもあるし。そういうところって大事だと思うんです。その可能性を生涯スポーツは持っているので、もっとこれからは強力なキラー・コンテンツに生涯スポーツがなっていきそうな、もうそういうところがあるんじゃないのかなと思っています。

何の結論も無いですが、生涯スポーツって何か健康づくりどのというよりも、メディアに対する魅力でいうと、もの凄いパワーを秘めているというので、その辺りをどんなふうに引き出していくのかというのは、鹿屋にいる学生の皆さんとかが「新しく作ろうよ」ということになるんじゃないかなと思います。